

JIA 北海道支部卒業設計コンクール 2012

2012年3月17日(土) 10:30~15:00

会場: STV 北2条ビル B1F 会議室

公開審査風景





JIA 北海道支部卒業設計コンクール 2012 審査経過

12月20日 ワーキンググループにて日程、各大学、高専、短大、専門学校に案内を発送

3月01日 ワーキンググループにて審査員を確定

審査員長	中山 眞琴 (ナカヤマアーキテクト)	JIA 会員
審査員	山内 圭吉 (山内圭吉建築研究所)	JIA 会員
	畠中 秀幸 (スタジオシンフォニカ (有))	JIA 会員

以上の三氏による審査を決定

3月17日 STV 北2条ビル B1F 会議室において公開審査にて厳正な審査の基、審査員の投票結果をもとに協議し、
金賞1点、銀賞1点、銅賞1点、審査員特別賞3点選出。

4月20日 JIA 北海道支部総会において金賞、銀賞、銅賞、審査員特別賞の表彰状を授与予定。

JIA 北海道支部卒業設計コンクール 2010 審査結果

番 号	作 品 名	氏 名	審査結果	備 考
1	密度の巢	青木 尚人		北海学園大学
2	ゆるやかにそそぐ -イチバとともに-	佐藤 友紀	中山審査員特別賞	北海学園大学
3	日常のかけら～すべの人が創るもの～	笠 雄季	1次審査通過	北海学園大学
4	湖の神様と湖上の街	斉藤 公平		北海道大学
5	白氷の大地	高橋 慶多	畠中審査員特別賞	北海学園大学
6	街区の表層	渡邊 皓太		札幌市立大学
7	帯の路地	野村 和也	1次審査通過	北海道工業大学
8	はじまりの詩	佐々木清奈	山内審査員特別賞	北海学園大学
9	場の総体	島田 祐樹		札幌市立大学
10	浸透する境界	大浦 拓馬		北海学園大学
11	変わらないもの Canal side shed	杉山 楓佳		北海学園大学
12	-小樽市におけるコンバージョン計画-	鍋田 祐希		室蘭工業大学
13	停留所のまち～体感する風景～	田中 元	銀賞(本選出場)	北海道大学
14	生きるまち	植地 剛		北海道大学
15	移ろいゆく街の虚ろ	高梨 潤		北海道大学
16	Gap -札幌市電延伸計画に基づく複合施設-	笠井 佳祐		室蘭工業大学
17	境界を溶かし、建築。	狩原 拓巳		北海道工業大学
18	境界の解体と構築-支笏湖畔の集落-	根本 周	1次審査通過	北海道工業大学
19	水の郷	菅原 仁美	金賞(本選出場)	北海道工業大学
20	関係性の記述	石岡 里美	1次審査通過	北海道工業大学
21	2°-美瑛町における店舗併用住宅-	山下 輝彦	1次審査通過	室蘭工業大学
22	market -卸売市場×モール-	大谷 広司	銅賞(本選出場)	室蘭工業大学
23	その奥にみるもの	坂井 一仁	1次審査通過	札幌市立大学
24	何もできない建築	室橋 亨	1次審査通過	北海道芸術デザ イン専門学校
25	oneroom hospice	鈴木 悠高		北海道芸術デザ イン専門学校
26	場の創出 最小限エレメントによる空間制作の実践 デザイン・イン・モーション	萩原由美乃		札幌市立大学
27	景観の構造と制作の過程、そして立ち現れる空間とは	藤田 元輝		札幌市立大学
28	ARTIST KOTAN	熊谷 彩佳		北翔大学

■総評

ここ10年程、北海道の大学の卒業設計の審査を引き受けてきた一番の楽しみは新しい発見であり、逆に言うと勉強になるからだ。しかし、ここ数年何かおかしい。そんな作品に出会うことが極端に減ったのだ。

1人よがりの夢物語は沢山あるのだが、社会にまで言及する鋭い視線が見あたらない。

伊東風、妹島風、藤本風であったりと、既視感にあふれた作品はもう見たくはない。

社会を変革できるようなそんな希望に満ちた作品はもはや期待ができないのか、こんなことを考えている私の方が時代から遠のくのか。

最近の雑誌に左右されない、不完全でも力強いプリミティブな作品はもう見る事が出来ないのか。

少し悲哀をこめて思う毎日である。その中でも北海道支部で選んだ作品には「何か」がちょっとだけある。

何かを変えたい、何かをしたい、そんな心の叫びが感じられる作品である。

審査委員長 中山真琴（なかやままこと） 講評

今年の応募数は20作品、例年の応募数25~28作品を考えると少し寂しい感は否めないがそれは作品のレベルそのものが劣るものではない。

応募規定によりまとめられた3枚のパネルと大きな模型はどれも力作揃いで長丁場の公開審査を十分に楽しませてもらった。全体の印象として、若干の調整で実現可能な破綻なく優等生的によくまとめ上げられた作品が多く、各審査員の作品の読み取りにそれほどズレもなくスムーズに審査は行われた。

それは言い方を変えると我々の持っている建築の枠や想定を超える作品はなく、一步踏み違えると崖下に転落する、現実と空想の尾根を歩くようなスリリングな作品がなかったとも言える。この学生だけの特権とも言える「危なっかしさ」に期待しているのは私だけだろうか・・・。思い通りに完成した作品、そうならなかった作品、作者それぞれに思いは様々あると思う。しかし、長い作品造りの中できっと「建築」に可能性を少しでも感じることは出来たと思う。

まだ通過点です、その感じた可能性をいつまでも信じてこれからも建築に携わってもらえればと思う。

審査委員 山内圭吉（やまうちけいきち） 講評

同じ建築を志す者として、「いま」まさに社会に出んとする皆さんの想いを感じる事が出来て、大変嬉しく思いました。問題意識の設定においては、歴史性や同時代性に立ち位置を求めながら、より遠くを目指す視座をもっていることが望まれると思います。その中で「ここ」をどうするのか、もしくはどうしたいのかに対する欲求が強い作品を評価しました。その意味では、皆さんの作品に多少の物足りなさを感じたのも事実です。問題を想定しにくい時代なのかも知れません。

かく言う私も、10カ月ほど前に脳卒中を患いました。その過程において、ある意味劇的な変化を余儀なくされることにより、様々な新しい問いを自分に投げかけました。それにより獲得できた視点は、自分にとっての財産になると思っています。

是非、問い続ける姿勢を忘れずにいて欲しいと心から願っています。

審査委員 畠中秀幸（はたけなかひでゆき） 講評

以上審査員講評（順不同）